

石上乙麻呂「秋夜閨情」再考 —その制作意図について—

Isonokami-no-Otomaro's 'An Autumn Night's Female Yearning' 秋夜閨情
Revisited : Exploring the Creative Intentions

住 谷 孝 之

SUMITANI Takayuki

キーワード：日本文学・中国文学・漢詩文

序

石上乙麻呂「秋夜閨情」⁽¹⁾

他郷類夜夢

他郷を類夜夢み

談與麗人同

談じて麗人と共にす

寢裏歡如實

寢裏 歛びて実の如きも

驚前恨泣空

驚前 恨みて空に泣く

空思向桂影

空思して桂影に向かひ

獨坐聽秋風

獨坐して秋風を聴く

山川嶮易路

山川 嶮易の路

展轉憶閨中

展転として閨中に憶ふ

(現代語訳) 夫のいる他郷のことを毎晩夢に見て、そこで麗しいあ

の人と一緒に語りあう。寝ている時の夢の中では嬉しさのあまり、まるでそれが真実であるかのように思えてしまうが、目が覚めてきてそれが夢だと分かると、目覚めたことを悔い、その空しさに泣いてしまう。いたずらな想いを抱きつつ月を眺めては物思いにふけり、一人座って秋風の音に耳を傾ける。私たち二人はいくつもの山と川とが重なる険しい路に隔てられており、寝返りを打ちつつ、この閨の中で遠くにいるあの人のことを思うのだ。

右の詩は、奈良時代の日本の漢詩集『懷風藻』に収録された、石上乙麻呂(？―七五〇)の「秋夜閨情」という詩である。石上乙麻呂は、奈良時代の名門貴族の家に生まれ、当時の朝廷でも順調な出世を遂げていた。ところが天平十一年(七三九)、参議・藤原宇合の未亡人、久米若女(久米若壳)との姦通を罪に問われ、土佐国への配流となった(続

『日本紀』卷十三)。「懐風藻」の石上乙麻呂伝によれば、この土佐流罪の時の想いを詠んだ漢詩が、『銜悲藻』二卷(亡逸)にまとめられたという。そして『懐風藻』に収録された四首の詩(「飄寓南荒贈在京故友」)「贈孫公之遷任入京」「贈舊識」「秋夜閨情」は、詩題とその内容から、『銜悲藻』に収められた土佐配流時の作品と一般にみなされている。

筆者は前稿で、「秋夜閨情」に関する従来の見解がおおむね「作者の乙麻呂が久米若女への恋情を詠った詩」「和化歌された漢詩」とする解釈の不当を指摘し、本詩が中国古典詩における伝統的な「閨怨」の主題の定型どおりの詠み方で解釈すべきであることを論じた。本稿では、前稿で可能性のみ言及するにとどまった本詩の制作意図について、中国(漢・唐)における「閨怨(閨情)」の詩(およびそれに類する詩)に詠まれた「女性像」の解釈との関連から論証する。

一、中国古典における閨怨詩(閨情詩)等が詠ずる女性像について
従来、石上乙麻呂の「秋夜閨情」については、『玉台新詠』との関連で論じられることが多く、そこに収録される男女間の情愛のやり取りを詠じた艶詩(艶情詩)と無条件に結びつけて解釈されることが多かった³⁾。しかしながら、このような解釈には無理がある。

確かに中国古典詩(漢詩)において、一般に男女の情愛やそれに関連する題材を詠じた詩は「艶詩」と呼ばれており、その意味では本詩のような閨怨詩(閨情詩)もその範疇に入ることには間違いない。しかしここで注意しなければならないのは、中国古典における「閨怨」の主題には、独自の特徴として「作者たる詩人の実生活と直接の関係のない仮構の設定で三人称的に詠まれる」という様式が存在する点である。そこでは女性は完全な客体的存在として描かれ、「閨(女性の寝室)」の彼女が意中の男性(夫・天子など)に逢えないがために抱く「情や

怨」を中心⁴⁾に詠ずることになっている⁵⁾。このような牢固たる主題様式を古く漢代から確立してきた閨怨詩に対して、従来の説がしばしば閨怨詩と同一視して取りあげる艶詩は、「作者の恋愛相手という実在の女性との具体的な関係のもとで一人称的に詠まれた」ものである。同じ「艶詩」の範疇に含まれ、類似した表現が用いられることも多い両者だが、その表現する目的の点では本質的な相違が存在するのである。このような相違を無視して、「秋夜閨情」という明らかに閨怨の主題を想定した本詩と、実在の恋の相手を想定して詠まれた(非閨怨的)艶詩とを同一視すること(または本詩を「作者本人の現実の恋情を詠じた特殊な閨怨詩」とみなすこと⁶⁾)は、中国古典文学における閨怨の伝統的な主題様式を無視した不自然な解釈にほかならない。

さらに前稿で可能性のみ言及するにとどまっていたことだが、従来の説が見落としていた重要な点として、中国古典詩の閨怨の主題には、単なる男女の情愛を詠じるだけではなく、その中に作者が仮託した寓意が存在する(またはそのような寓意が存在すると見なす)場合もあるということがあげられる。閨怨詩は『玉台新詠』にも多く収録されているが、そこに収録されている、もっぱら詩宴の席で人々に競争された作品が全てであるわけではない。閨怨の主題は『文選』や唐詩などにも見られるように、中国古典文学史上、古くから詠じられてきたものであり、その中には「作者の懷才不遇の思いを仮託する作品」も存在するのである。従来の説では本詩と『玉台新詠』との関連のみを重視するあまり、この点がほぼ全くといって良いほど顧みられてこなかった。だが筆者は、このような仮託された寓意こそ、本詩の制作意図があると考えられる。その方が、従来のような閨怨の主題の定型を無視した解釈よりも、はるかに中国古典文学の伝統に沿った自然な解釈といえる上、作者である乙麻呂が本詩を詠んだ土佐配流の当時の境

遇と無理なくつながると見るからである。

二、閨怨的女性像の起源としての『楚辞』

最初に、閨怨詩に詠まれた女性像の例を見る前に、その起源として『楚辞』に描かれた女性像について言及しておきたい。

『楚辞』とは、中国戦国時代の楚の国で作られた韻文ジャンルである。『楚辞』作品を収録する書である。この『楚辞』に収められた作品は、戦国時代の楚の政治家であった屈原（名は平、原は字）の作を中核とするが見なすが、近代以前の中国の伝統的解釈である。前漢の司馬遷の歴史書『史記』巻八十四「屈原賈生列伝」によれば、屈原は優れた才能と高潔な人格を備えた賢臣であったが、彼を妬んだ佞臣たちの讒言により、主君の楚王に疎まれ、楚の朝廷から追放された。江南に放逐された屈原は、楚の前途を悲観し汨羅の淵に入水して死んだという。

『楚辞』の代表作である「離騷」は、主人公の靈均という人物が、悪人の嫉妬を受けて地上での居場所を失い、天上の世界に飛翔するが天宮に入ることを拒まれてしまう。その後、神話伝説の女性たちに求婚するが、いずれも失敗に終わり、再び天上に昇ろうとするが途中で郷里を見下ろしたところ隊列が進まなくなるという記述で終わる、という内容の長編叙事詩である。司馬遷はこれを屈原の自伝的叙事詩と解し、「屈平之作離騷、蓋自怨生也」（屈平の「離騷」を作るは、蓋し怨みより生ずるならん）と、佞臣の讒言を信じて自分を遠ざけた主君・楚王（懷王）への「怨み」からこれを作ったとする。

司馬遷のこうした解釈を継承し、さらに「離騷」以外の『楚辞』の主要作品をも屈原との関連で解釈したのが、後漢の王逸『楚辞章句』である。この中で、王逸は「離騷」を、讒言を受けた屈原が主君の懷

王を「風諫」（諷諫、遠回しに諫めること）するために作ったとし、作中で主人公の靈均が求婚する女性（宓妃・佚女）について、「以譬賢臣」（以て賢臣に譬ふ）と、賢臣の比喩と解した（「離騷」後叙）。このような「離騷」に代表される『楚辞』に詠まれた女性を臣下の比喩と見なす王逸の解釈が『楚辞』の標準的注釈として受け入れられたことは、後世の文学作品にも大きな影響を与えた。とりわけ以下に後述する、閨怨詩などにおける男女間の思いを君臣関係に擬える解釈の起源となったことは、中国古典文学の伝統的解釈においては広く認められていることである。

三、「古詩十九首」の閨怨的女性像

本節および次節では、閨怨詩に作者の寓意を見る解釈の例として、唐以前の文学の名作を収録する『文選』に収録された、漢代の閨怨詩とそれに近接する閨怨的手法で詠まれた詩を見ることにする。これらの作品の中で、三人称的手法で詠まれた「男性と逢えない女性」というものが、後世の注（李善注・五臣注）でどのように解釈されているかを確認したい。

『文選』巻二十九、「古詩十九首」其一「行行重行行」（行き行きて重ねて行き行く）

行行重行行 行き行きて重ねて行き行く

與君生別離 君と生きながら別離す

相去萬餘里 相ひ去ること万余里

各在天一涯 各、天の一涯に在り

道路阻且長 道路 阻にして且つ長し

會面安可知 會面 安くんぞ知るべけん

胡馬依北風 胡馬 北風に依り

越鳥巢南枝 越鳥 南枝に巢くふ

相去日已遠 相ひ去ること日に已に遠く

衣帶日已緩 衣帶 日に已に緩し

浮雲蔽白日 浮雲 白日を蔽ひ

遊子不顧反 遊子 反るを顧はず

思君令人老 君を思へば人をして老いしむ

歲月忽已晚 歲月 忽として已に晩れぬ

棄捐勿復道 棄捐せらるるも復た道ふこと勿からん

努力加餐飯 努力して餐飯を加へよ

この詩は漢代の無名氏（読み人知らず）の作、「古詩十九首」第一首である。本詩の趣旨については、遠くに旅立って帰らない夫を思う妻の情を詠った「思婦の詩」、即ち閨怨の詩として解釈されるのが現在では普通となっている。⁽¹⁰⁾

ところが、唐代を代表する文選注（李善・五臣）の解釈は、そのよ
うな現在の解釈とは異なるものとなっている。李善注は、本詩の「浮
雲蔽白日、遊子不顧反」の句について、次のような解釈をしている。

浮雲之蔽白日、以喻邪佞之毀忠良。故遊子之行、不顧反也。文

子曰、「日月欲明、浮雲蓋之」。陸賈『新語』曰、「邪臣之蔽賢、猶
浮雲之蔽日月」。古楊柳行曰、「讒邪害公正、浮雲蔽白日」。義與此
同也。……（浮雲の白日を蔽ふ、以て邪佞の忠良を毀るに喩ふ。

故に遊子の行、反るを顧はざるなり。文子に曰く、「日月明ならん
と欲するも、浮雲之を蓋ふ」と。陸賈『新語』に曰く、「邪臣の賢
を蔽ふは、猶ほ浮雲の日月を蔽ふがごとし」と。「古楊柳行」に曰

く、「讒邪公正を害し、浮雲白日を蔽ふ」と。義 此と同じなり。
……）。

また李善注と同じく唐代の文選注を代表する五臣注は、詩全体の趣
旨について以下のように解釈する。

銑曰、此詩意爲、忠臣遭佞人讒譖、見放逐也（張）銑曰く、「此
の詩の意は忠臣の佞人が讒譖に遭ふが爲に、放逐せらるるなり」
と。

さらに詩中の句「浮雲蔽白日、遊子不顧反」、「思君令人老、歲月忽
已晚」についても、五臣注はそれぞれ次のように解釈している。

良曰、白日、喻君也。浮雲、謂讒佞之臣也。言佞臣蔽君之明、
使忠臣去而不返（劉）良曰く、「白日、君を喩ふるなり。浮雲、
讒佞の臣を謂ふなり。佞臣 君の明を蔽ひ、忠臣をして去りて返
らざらしむるを言ふ」と。

翰曰、思君、言戀主也。恐歲月已晚、不得効忠於君（李周）翰
曰く、「君を思ふ、主を恋ふるを言ふなり。恐らくは歲月已に晩れ
て、忠を君に効すを得ざらん」と。

以上から明らかなように、李善・五臣の注釈では、本詩を、忠良な
臣下が佞臣の讒言を受けて放逐された後、仕えていた君主をなおも思っ
て作った詩と解釈している。それがあたかも閨怨詩における女性が思
う男性を慕うかのような詠いぶりであるのは、中国古典詩に詠じられ

る男女関係をしばしば君臣関係の比喩とみなす強固な解釈の伝統が存在するからである。⁽¹⁾

ただ右の其一の場合は、閨怨の仮託か、放逐された賢臣の直叙の詩か、解釈が曖昧な点に不安がある。次に、同じ「古詩十九首」の中から、より積極的に、閨怨詩における男女関係に君臣関係の比喩を見る解釈例を見ることにしよう。

「古詩十九首」其二「青青河畔草」(青青たり河畔の草)

青青河畔草 青青たり河畔の草
鬱鬱園中柳 鬱鬱たり園中の柳
盈盈樓上女 盈盈たり樓上の女
皎皎當窗牖 皎皎として窓牖に当る
娥娥紅粉粧 娥娥たり紅粉の粧
織織出素手 織織として素手を出だす
昔爲倡家女 昔は倡家の女たり
今爲蕩子婦 今は蕩子の婦たり
蕩子行不歸 蕩子 行きて帰らず
空牀難獨守 空牀 独り守ること難し

「古詩十九首」其二「青青河畔草」は、家に帰らぬ夫(蕩子)を、空閨の中で独り待ち続ける妻の悲嘆を詠じた、典型的な閨怨の作である。この詩について五臣注は、「銑曰、此喻人有盛才事於暗主。故以婦人事夫之事託言之」(銑曰く、「此れ人の盛才有りて暗主に事^{つか}ふるを喩ふ。故に婦人の夫に事ふるの事を以て之を託言す」と)と、暗君に仕える才能ある臣下の不遇が仮託されていると解釈する。また其五「西北有高樓」(西北に高樓有り)の趣旨は、自ら奏でる琴曲を理解する伴侶を

石上乙麻呂「秋夜閨情」再考(住谷孝之)

得ない高貴な女性の嘆きを詠うものだが、李善注は「此篇明高才之人、仕宦未達、知人者稀也。西北乾位、君之居也」(此の篇明らか高才の人の、仕宦未だ達せず、知人なる者稀なるなり。西北は乾の位(方位)、君の居なり)とし、五臣注も「翰曰、此詩喻君暗而賢臣之言不用也。西北乾位、君位也」(翰曰く、「此の詩は君の暗にして賢臣の言用いられざるを喩ふるなり。西北は乾の位、君の位なり」と)とあり、いずれも君主に用いられない賢臣の不遇を仮託した詩と解釈する点で共通する。

次の詩は有名な七夕伝説にまつわる内容だが、天上の河漢(天の河)に阻まれて、牽牛(夫)との逢瀬を遂げられない織女(妻)の悲嘆を詠んだこの詩も、閨怨詩の変奏と見なせよう。

「古詩十九首」其十「迢迢牽牛星」(迢迢たる牽牛星)

迢迢牽牛星 迢迢たり牽牛星
皎皎河漢女 皎皎たり河漢の女
織織擢素手 織織として素手を擢^あげ
札札弄機杼 札札として機杼を弄^{もてあそ}ぶ
終日不成章 終日 章^あを成さず
泣涕零如雨 泣涕 零^おつること雨の如し
河漢清且淺 河漢は清く且つ浅し
相去復幾許 相ひ去ること復た幾許ぞ
盈盈一水間 盈盈 一水の間
脈脈不得語 脈脈^{ぼくぼく}として語るを得ず

五臣注は本詩の趣旨を「濟曰、牽牛、織女星、夫婦道也。常阻河漢不得相親也。此以夫喻君、婦喻臣。言臣有才能不得事君、而爲讒邪所隔、

五五

亦如織女阻其歡情也」(呂延) 濟曰く、「牽牛、織女星、夫婦の道なり。常に河漢に阻まれ相ひ親しむを得ざるなり。此れ夫を以て君に喩へ、婦を臣に喩ふ。言ふところは臣に才能有るも君に事ふるを得ずして、讒邪の隔つる所と為る、亦た織女の其の歡情を阻まるるがごとしなり」と)とし、夫婦の關係を君臣の關係になぞらえ、才能ある賢臣が邪惡な佞臣の讒言によつて君主の傍に仕えることができずにいることを、織女星が牽牛星と天の河で隔てられていることに仮託していると解釈している。また他の五臣の注も同様に、「向日、終日不成章、喩、臣能進德脩業、有文章之學、不爲君所見知。不用於時、與不成何異也。泣涕、謂悲王室微弱、朝多邪臣、恐國之亡」(呂) 向日く、「終日章を成さず、臣能く徳を進め業を修め、文章の學有るも、君の知らるる所と為らざるを喩ふ、時に用ひられざるは、成らざると何ぞ異ならんや。泣涕、王室の微弱し、朝に邪臣多きを悲しみ、國の亡ぶるを恐るるを謂ふ」と、「良曰、……盈盈、端麗貌。脈脈、自矜持貌。喩端麗之女、在一水之間、而自矜持不得交語、亦猶才名之臣與君阻隔、不得啓沃也」(劉) 良曰く、「……盈盈、端麗たる貌なり。脈脈、自ら矜持する貌なり。端麗の女、一水の間在りて、自ら矜持して語を交はすを得ざるを喩ふ、亦た猶ほ才名の臣の君と阻隔せられ、啓沃(上申)するを得ざるがごとしなり」と)と、やはり詩中の句「終日不成章、泣涕零如雨」「盈盈一水間、脈脈不得語」を、才能有る臣下が君主に遠ざけられて忠を尽くせない意を託したものと解している。

以上のように、「古詩十九首」中の閨怨詩やそれに近接する詩に描かれた「意中の男性に逢えない思婦・相応しい伴侶を得られぬ美女」の不遇は、「仕える君主に遠ざけられた臣下・君主に自らの才能を知られていない臣下」の不遇を仮託したものとする解釈が存在していることがうかがえるであろう。

四、六朝の閨怨的女性像—曹植詩を例に—

「古詩十九首」以後の詩でも、孤閨の妻や伴侶を得られぬ女性に仮託して、詩人の不遇を詠じたと解される作品は継続的に作られている。例えば、後漢末—三国時代の建安文学の集大成者である魏の曹植には、詩中に描かれる女性に自己の懷才不遇の思いを託したと見なされる作

『文選』卷二十九、曹植「雜詩六首」其四「南國有佳人」(南國に佳人有り)

南國有佳人 南國に佳人有り

容華若桃李 容華 桃李の若し

朝遊江北岸 朝に江北の岸に遊び

日夕宿湘汜 日夕に湘汜に宿る

時俗薄朱顏 時俗 朱顏を薄んじ

誰爲發皓齒 誰が為にか皓齒を發かん

俛仰歲將暮 俛仰にして歲は將に暮れんとし

榮耀難久持 榮耀 久しくは持み難し

曹植「雜詩六首」其四「南國有佳人」の趣旨は、美しい女性が自らの美貌を理解されないまま歳をとってゆくことを嘆くものであるが、五臣注はこれを「翰曰、以佳人喩賢人、不見重於時」(翰曰く、「佳人をして賢人の時に重んぜられざるを喩ふ」と)と、賢才が世に重んじられず、君主に仕える機会のないことを寓意したものと解している。また同じ曹植の樂府「美女篇」(『文選』卷二十七、「美女妖且閑、采桑岐路間……」)もまた、自らに相応しい伴侶を得られぬ美女を詠う詩だが、五臣注では「銑曰、以美女喩君子。言君子既有美行、上願明君而事之、

……」(銚曰く、「美女を以て君子に喩ふ。言ふところは君子既に美行有り、明君ありて之に事ふるを上ひ願ふ。……」)と、やはり才能有る者(作者自身)が君主に仕える機会のない不遇を仮託した作とみなしている。

以上の「古詩十九首」や曹植の閨怨詩などに詠まれた女性像が、おしなべて実際の君臣関係や作者の不遇を仮託したものであるかについては、現代では疑問とする向きもある。ただここではそうした作者の真意の当否よりも、石上乙麻呂と同時代の唐代において、科擧の詩文の模範として重視された『文選』の注釈である李善注・五臣注に、閨怨詩にこのような仮託の意図が込められているとする解釈が存在した点こそが重要であろう。両注釈に共通してこのような解釈が存在していることは、閨怨詩に作者の仮託を見るこのような見方が当時一般に広く通行していたことを示しているにほかならないからである。そしてこのような解釈が広く通行する状況の下で、他の詩人たちもまたそれに倣い、同様の意図を込めた閨怨詩を詠むようになるのは、ごく自然な成り行きといえよう。

五、唐代の閨怨的女性像―李白詩を例に―

このような解釈が通行していた文学環境の下、唐代の閨怨詩などに詠まれた思婦や美女には、明らかに作者の不遇を仮託した作品が存在している。その例として、盛唐を代表する詩人、李白の作を見てみよう。

李白「古風五十九首」其四十九「美人出南國」(美人南國より出づ)

美人出南國 美人南國より出づ

灼灼芙蓉姿 灼灼たり芙蓉の姿

石上乙麻呂「秋夜閨情」再考(住谷孝之)

皓齒終不發	皓齒 終に発かず
芳心空自持	芳心 空自しく持す
由來紫宮女	由來 紫宮の女
共妬青蛾眉	共に青蛾の眉を妬む
歸去瀟湘沚	歸り去れ 瀟湘の沚
沈吟何足悲	沈吟するも何ぞ悲しむに足らん

李白の「古風五十九首」は、漢魏の「古の詩風」に倣い、自らの感懐を詠んだ連作詩である。その中には自身の感懐を他の事物に寄託して詠んだ「興寄」の手法を用いたものも含まれている。右にあげた其四十九「美人出南國」は、南國出身の美女が、皇帝の宮殿(紫宮)の女たちの嫉妬により、宮中を去らざるえなくなったことを詠じたものである。詩句を一読して明らかのように、この詩は先の曹植「雜詩六首」其四を踏まえた模擬の作である。そして先述の「古風」という作品の性格やそこで用いられる「興寄」の手法を考慮すれば、この詩に詠まれた「宮女たちの嫉妬により皇帝の宮殿を去る美女」には、作者である李白自身の姿―宮廷人の讒言により玄宗の宮廷を放逐された―が仮託されているとみてほぼ間違いないだろう。この作以外にも、李白は閨怨詩の作品を残しているが、現代中国の注釈者の間では、それらの一部にも、やはり詩中の女性像に作者自身の投影を見る解釈が通行している。

乙麻呂と同時代の詩人である李白の詩に、このような「君主に遠ざけられた・君主の知遇を得られない自己の不遇」の仮託として「三人称的女性像」が詠まれているという事実は、乙麻呂の「秋夜閨情」に描かれた「女性」もまたそうした自己の仮託とみなす解釈の確かさを表していよう。しかもそうした解釈は、この時代に突然出現した一過

性のもので決してない。これまで見てきたとおり、それは中国古典文学解釈史の長い時の流れの中で形成され継承されてきた、確固たる「伝統」なのである。

六、石上乙麻呂「秋夜閨情」の制作意図および「山川嶮易路」の寓意するものについて

前節まで、「古詩十九首」から唐の李白までの閨怨的作品の実例を見てきた。本節では、これらの作品で詠まれた「作者と直接関係ない三人称的女性像」の寓意性を参考に、石上乙麻呂「秋夜閨情」の制作意図を改めて考えていきたい。

「序」で述べたとおり、乙麻呂の土佐配流は、『続日本紀』に記された藤原宇合の未亡人、久米若女（久米若売）との姦通を罪に問われたことであった。このため従来の解釈の多くは、この件を本詩と結びつけて「久米若女への恋情を詠った」と見なしてきたのもすでに述べたとおりである。だが筆者の見るところ、『懐風藻』の撰者はそうした見解（姦通事件）とやや異なる視点から配流の事情を見ているように思われる。

『懐風藻』石上乙麻呂伝では、乙麻呂の土佐流罪と『銜悲藻』編纂について、「嘗有朝譏、飄寓南荒、臨淵吟澤、寫心文藻。遂有銜悲藻兩卷、今傳於世」（嘗て朝譏有りて、南荒に飄寓し、淵に臨み沢に吟じ、心を文藻に写す。遂に銜悲藻兩卷有り、今世に伝はる）と記している。従来でもこの記述が『楚辞』を典拠とし、乙麻呂の不遇を屈原に擬える意図があったことは指摘されている²⁰。もちろんこの指摘自体は間違っていないが、筆者はここに『懐風藻』撰者のより積極的な意図があるのではないかと主張したい。

前節まで指摘したとおり、閨怨詩の女性像は、「君主に遠ざけられた・

君主の知遇を得られない作者の不遇」の仮託として解釈する伝統が存在した。そしてその不遇の理由として、しばしば「邪悪な佞臣」の存在があげられる。『史記』の屈原の事跡を振り返れば、彼が楚王に疎まれ宮廷を追放されたのは、その才能を妬む佞臣の讒言によるものであった。「古詩十九首」の中に出てくる「浮雲」（其一）、「河漢」（其十）の語について、李善注や五臣注は「忠臣を君主から遠ざける佞臣の比喩」と解釈していた。李白は「古風五十九首」其四十九で、自分を讒言した玄宗の宮廷人を「美女の容貌を妬む宮女たち」に喩えていた。

これらを踏まえた上で「秋夜閨情」に詠まれた「山川嶮易路」の句を改めて見てみると、ここにそのような寓意が存在する可能性が浮かんでくる。この句は表面的には、「山と川の重なる険しい道（易）は偏義複詞で用いられ意味なし）が夫婦（男女）の間にあつて疎通を妨げている」というものだが、ここに君臣間の仮託があると考えれば、「君主に自らの思いを伝えることができなない忠臣の憂い・憤懣」の喩えと解することができよう。さらに一歩進んで、険阻なる道に存在する「山川」は、或いは「古詩十九首」其一の「浮雲」や其十の「河漢」のような、君臣の間を阻害するもの、すなわち「忠臣である自分を君主から遠ざけた佞臣」を寓意していると解することも可能だろう。そしてこれらの例を参考に、「乙麻呂伝」の当該記述を振り返れば、『懐風藻』の撰者には、乙麻呂の土佐配流の背後に彼の政敵の讒言があったことを暗示する意図があったと言えるのではなからうか²¹。

以上の点、および「秋夜閨情」に詠じられた「山と川に遮られて、男性（夫）と逢えない怨み（不満）を抱きつつ、なおも彼を慕いつづける女性（妻）」の姿を考慮すれば、本詩の内に込められた乙麻呂の思いと、佞臣の讒言を信じて自らを遠ざけた楚王への怨みを抱きつつ、それでも主君への忠義の情を抱き続けた屈原と同様の、讒言を信じて

自らを遠ざけた主君（すなわち聖武天皇）に対する「怨慕の情」であると見るべきではないか。⁽²⁾

石上乙麻呂の「秋夜閨情」という詩は、従来の解釈のような乙麻呂個人の恋情を詠んだ内容だとは考えがたい。その制作意図は、閨怨詩の伝統的解釈に従い、配流の身にある自己の不遇の思いと、自分を遠ざけた主君である聖武天皇への怨慕の情を詠んだものであり、本詩は古代中国の士人（知識人）の懷才不遇の精神に忠実に沿って作られたものであると解すべきである。

結語

ここまで『楚辞』に詠まれた女性像の解釈を起源とする、漢代の「古詩十九首」から唐の李白までの閨怨詩や閨怨の手法で詠まれた詩における「作者と直接関係のない三人称的手法で描かれた女性像」の実例を見た上で、石上乙麻呂「秋夜閨情」の詩もまた、この系譜上にある作品であることを論じてきた。これらの詩における男女関係は、君臣関係の寓意とみなす解釈があり、この解釈に従って、作中の「意中の男性や相応しい伴侶と逢えない女性像」は、「君主に遠ざけられた・君主の知遇を得られない作者自身」の仮託として詠まれてきた。こうした閨怨詩における女性に作者自身の仮託を見る解釈は、唐代以降も「中国の過去における正統的な解釈」として継承され、現代に至ってもなお一定の影響力を維持するに至っている。このような中国古典文学の強固な作品解釈の伝統を踏まえれば、石上乙麻呂の「秋夜閨情」もまた、従来のような「閨怨」の主題特有の様式をねじ曲げ、「乙麻呂の久米若女（或いは都の女性）への恋情を詠んだ」といった恣意的解釈を行うよりも、中国古典の伝統にのっとった閨怨詩解釈の系譜から生み出された「君臣関係の仮託の作」と考えるのが自然であり、妥当であろう。

以上から、筆者は石上乙麻呂「秋夜閨情」の制作意図について、「恐らくは讒言によって」土佐に流された作者の不遇の思いと主君・聖武天皇への怨慕の情を、閨中の女性が意中の男性（夫）に逢えないがために生じるやるせない思いに仮託したもの」と結論づけたい。⁽³⁾

注

(1) 本詩を収録する『懷風藻』の本文は、土佐朋子『校本 懷風藻』（新典社、二〇二一年）に拠るが、一部の文字・字体については諸注釈書を参照して改めている。

(2) 「石上乙麻呂「秋夜閨情」考―「閨怨」の主題に即して―」（『中国詩文論叢』第四十集、二〇二一年）

(3) 「秋夜閨情」に関する先行解釈については、注(2)所掲の前稿を参照。

(4) 中国古典詩における男女の恋愛がこのような「閨怨」を中心とする「三人称的手法」をとって詠まれる理由については、既に松浦友久「唐詩に表われた女性像と女性観」（『中国詩歌原論―比較詩学の主題に即して―』大修館書店、一九九二年）などの先行研究に指摘がある。それによると、①古代中国の士人（知識人）の男尊女卑的倫理観、②中国社会における人為性尊重の伝統、③唐詩に代表される狭義の中国古典詩が様式として帯びていた古典的正統的な性格、等の原因から、古典文学の主な担い手である士人にとって、正統的文学である「詩」の中では、男女の恋情を一人称的・主体的に表白することは心理的な抵抗を生みやすく、それを回避する手段として、作者と直接関係のない、三人称的・客体化された女性像が詠まれることになったという。

(5) このほか、『玉台新詠』が収録する、梁の簡文帝とその周囲の文

人によって作られた詩（一般に「宮体詩」と称される）の中には、「美女の姿態・動作等の描写を関心の中心とする」艶詩も存在するが、これらの作品は本稿の論旨に関わらないためここでは取りあげない。こうした「宮体」風の艶詩については、興膳宏「艶詩の形成と沈約」（『乱世を生きる詩人たち 六朝詩人論』研文出版、二〇〇一年）等を参照。

(6) なお注(2) 所掲の前稿執筆後に筆者が閲読した、本間洋一「悲哀の詩人—石上乙麻呂—」（詩人たちの歲月—漢詩エッセイ—和泉書院、二〇二一年）では、六朝の『玉台新詠』および唐代の閨怨詩（張仲素「秋閨怨」）が仮構の世界を詠み上げたものであるのに対し、乙麻呂の「秋夜閨情」については、「こうして流謫の身となった彼の土佐での生活の中で作られたもので、「閨怨」は決して形式的なものではなく、作者の現実、生の体験に基づく痛切な悲哀を表現したものだ」と思われるのだ」（九頁）と述べている。「閨怨」は基本仮構の世界を詠うものであるとする見解は正しいものの、「秋夜閨情」の場合のみは例外に「若女との恋愛という」作者の現実」に基づくとする氏の見解については、本稿で述べるように無理のある解釈といえよう。

(7) 『史記』卷八十四「屈原賈生列伝」（中華書局、一九五九年）。

(8) 漢代におけるこのような屈原像の形成と「離騷」に代表される『楚辞』解釈については、矢田尚子「楚辞「離騷」を読む—悲劇の忠臣・屈原の人物像をめぐって—」（東北大学出版部、二〇一八年）、および同氏の「時空を越える『楚辞』」（『つなぐ世界史—古代・中世—清水書院、二〇二三年）を参照。

(9) 『文選』の本文および李善注・五臣注は、劉躍進『文選旧註輯存』（鳳凰出版社、二〇一七年）に拠るが、異体字については通行の

漢字に改め、句読点も適宜改めた。

(10) 「古詩十九首」其二「行行重行行」の作品解釈の異同については、松浦友久編『統校注唐詩解釈辞典（付）歴代詩』（大修館書店、二〇〇一年）における本詩の項（執筆：田中和夫）を参照。

(11) 注(10) 所掲の『統校注唐詩解釈辞典（付）歴代詩』における本詩の項（七八四頁）では、「行行重行行」という詩が男女間の相思の口ぶりであるのは、むしろ自明と思えるものであるが、男女間の思いを君臣間の思いに喩えるのは「楚辞」・「離騷」以来、培われてきたいわば伝統的読詩法であり、上記のように解釈するのは、中国の過去における、正統的解釈と言えるであろう」とある。

(12) 「古詩十九首」其十「迢迢牽牛星」に関する歴代の主要な解釈については、注(10) 所掲の『統校注唐詩解釈辞典（付）歴代詩』における本詩の項（執筆：田中和夫）を参照。

(13) 本詩については、川合康三『曹操・曹丕・曹植詩文選』（岩波文庫、二〇二二年）でも、「表面上はいわゆる美人哀暮の悲哀をうたうが、寓意の詩であることを示すのは、5「時俗 朱顔をうたう」の一句。「時俗」は本来「朱顔」を好むものであるのに、それを疎んじることから、美貌が才気を置き換えたものであることがわかる。衆に優れた才ゆえに妬みを受け、冷遇されたまま空しく老いていく作者自身を仮託する」（三二五頁）と述べている。

(14) 唐以後になるが、他の曹植の詩「雜詩六首」其三（『文選』卷二十九、「西北有織婦 窓綺何繽紛……」、「七哀詩」（『文選』卷二十三、「明月照高樓 流光正徘徊。上有愁思婦 悲歎有餘哀……」）などに詠まれた思婦についても、自らの不遇を仮託したものとす

る解釈が存在している（元・劉履『選詩補注』卷二）。

(15) 「古詩十九首」については、注(10) 所掲の『統校注唐詩解釈辞典

典〔付〕歴代詩』において、現代の解釈では単に夫婦の情愛を述べた「思婦の詩」と見なすのが普通であると述べている。また曹植の閨怨詩については、趙美子「曹植の閨怨詩―曹丕との関係を中心に―」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第四〇号、二〇二一年）では、曹植の閨怨詩に関して、従来の先行研究が兄の曹丕に遠ざけられた不遇感への仮託で捉えがちな点を疑問視し、その中には、夫婦の別れを借りて兄弟の別れを表現した仮託の作も存在すると指摘する。

(16) 李白の詩の本文は『李太白文集』（汲古書院影印、二〇〇六年）に拠る。

(17) 「由來紫宮女、共妬青蛾眉」の句は、『楚辭』「離騷」の「衆女嫉余之蛾眉兮」（衆女、余の蛾眉を嫉む）にちなむ。王逸注は「衆女、謂衆臣」（衆女、衆臣を謂ふ）と、屈原を妬む佞臣たちを、美女を妬む周囲の女性に喩えたと解する。

(18) 李白の「古風五十九首」其四十九「美人出南國」については、南宋・楊齊賢、元・蕭士贇『分類補注李太白詩』の「士贇曰、此太白遭讒擯逐後之詩也」（士贇曰く、「此れ太白の讒に遭ひて擯逐はれし後の詩なり」と）と、李白が宮廷人の讒言よって玄宗の宮中から放逐された天宝三載（七四四）頃の作とする見解が現代でもほぼ定着している。なお安旗『李白全集編年箋注』（中華書局、二〇一五年）は、「紫宮女、詩以喻朝中群小」（五四三頁）と、宮中で嫉視を受けていた前年の作とする。

(19) 例えば、現在中国における李白注の集大成とされる、郁賢皓『李太白集全集校注』（鳳凰出版社、二〇一五年）では、卷二十三「閨情」に収録される詩のうち、「長信宮」「長門怨二首」「怨情（新人如花雖可寵）」を、玄宗の宮廷で讒言を受けた李白自身を仮託

（石上乙麻呂「秋夜閨情」再考（住谷孝之）

した（またはその可能性がある）作とみなす。また（18）所掲の安旗『李白全集編年箋注』では、「怨歌行」について「太白此篇蓋借宮人以自傷、必遭讒被疏後所作。以下宮怨詩七篇、筆者注：長信宮」「玉階怨」「怨情（美人卷珠簾）」「于闐採花」「長門怨二首」「妾薄命」「怨情（新人如花雖可寵）」、意緒略同、似一時先後之作」（五五二頁）とする。

(20) 鈴木真年『懷風藻箋注』（土佐朋子『靜嘉堂文庫藏『懷風藻箋注』本文と研究、汲古書院、二〇一八年）等の諸注釈書および、渡邊寛吾「石上乙麻呂「銜悲」考―懷風所収の四首の詩から―」（『文學史研究』第四九号、二〇〇九年）を参照。

(21) 例えば、林古溪『懷風藻新註』（明治書院、一九五八年）は、石上乙麻呂の詩「飄寓南荒贈在京故友」について、「この詩を見ると、土佐に配流せられたことは、罪ではなかつたかも知れぬ。讒といふことにでもなるのかも知れぬ」（二四七頁）と述べている。また木本好信『律令貴族と政争 藤原氏と石上氏をめぐって』（塙書房、二〇〇一年）Ⅱ章「石上乙麻呂と藤原宇合・広嗣父子」によると、乙麻呂の土佐配流は、当時の太政官の執政者であった右大臣・橘諸兄が、自己に挑戦的な藤原広嗣の姻戚（叔父または伯父）であり協力者の関係にあった乙麻呂を中央政界から排除する目的でなされたことであるという。

(22) 石上乙麻呂「贈孫公之遷任入京」（孫公の遷任して入京するに贈る）の「余含南裔怨」（余は含む 南裔の怨）について、注（20）所掲の渡邊論文および同氏の「石上乙麻呂「南裔の怨」―その鄙での別れと詩作―」（『愛文』第三六号、二〇〇〇年）では、後句の「君詠北征詩」（君は詠む 北征の詩）との対偶関係などから、孫公との別れに際しての「この地に留まらなければならない怨み」

六一

「二人を引き離す別れを怨んでいる」と解釈する。しかしながら、「南裔」（「南荒」と同様に南方僻遠の地を指す。「荒裔」の語も参考にならう）の語が、中国古典文学において「広義の江南（長江流域以南の地）＝貶謫の地」を容易に連想させる点（例えば隋の孫万寿の詩「遠戍江南寄京邑親友」（遠く江南を成りて京邑の親友に寄す）には「賈誼長沙國、屈平湘水濱。江南瘴癘地、從來多逐臣」（賈誼は長沙の國、屈平は湘水の浜。江南は瘴癘の地、從來 逐臣多し）とある。また唐の張説の詩「南中別蔣五岑向青州」（南中にて蔣五岑の青州に向かふに別る）には「老親依北海、賤子棄南荒」（老親 北海に依り、賤子 南荒に棄てらる）とある）を考慮すれば、ここでの「南裔怨」の中に、詩人の逐臣としての思いと司馬遷が述べた「屈原の怨み」が重ねられていないとするのは無理であろう。従って「余含南裔怨」の句は、単なる「離怨・別怨」のような「離別の怨み（悲しみ）」ではなく、やはり作者の乙麻呂が南国土佐への流謫の不遇と主君・聖武天皇への怨みを、屈原に擬えて詠んだものと解釈すべきである。

(23)

中国文学史上、一人称的恋情を詠む艶詩が詩（狭義の古典詩）において一般に忌避され「日陰の文字」となった一方、三人称的手法で恋情を詠む閨怨詩が主要詩人たちによって継続して詠まれた要因は、おおむね注（4）所掲の松浦論文が指摘するとおりであるろうが、あえて筆者の卑見を加えるとすると、一部の閨怨詩に詠まれる男女の關係がこのように「君臣關係の比喩」と解釈されることが、「忠臣である自分を佞臣の讒言によって遠ざけた」等の、自らが仕える君主への「比興・諷諭」（隱喩による政治批判）の一種として機能したからという可能性もあるのではなからうか。中国古典詩歌においてこうした政治批判としての役目を担ってき

た「楽府詩」が、基本的に「民衆の思いを代弁して詠んだ歌」という「実作者と切り離された三人称的手法」で詠まれることや、閨怨詩がしばしば楽府題の形で詠われるという、これら両者の關係の近さを示す事実もまた、そうした可能性を示唆しているように思われる。